

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	こども発達支援センターmum		
○保護者評価実施期間	R7年 10月 1日		～ R7年 10月 29日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	26	(回答者数) 9
○従業者評価実施期間	R7年 9月 22日		～ R7年 10月 31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数) 8
○事業者向け自己評価表作成日	R7年 10月 21日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	個別療育による丁寧なこどもへの支援	一人のこどもに2人の担当職員を配置することで直接担当の視点と客観的な視点の両面から関わる事ができる こどもの知的発達と特設を分けて支援の組み立てを行うことで必要な支援を提供することができる 1回の療育ごとに評価から目標設定を丁寧に行うことができる	一家族に親担当、こども担当の2人担当制を活かし、OJTを行いながら職員のスキルアップを行う
2	個別療育による丁寧な家族支援	療育中、ご家族に担当職員が付き、相談支援及び療育等の流れや意図などの説明を行っている。また、年間5回のご家族向け研修(特性の理解、構造化など)と参加保護者同士のグループワークを実施している	二人体制を活かし、こどもへの関り方や声のかけ方をモデルしたり、支援の方法を説明することで保護者への特性理解につなげていく。
3	アセスメントが充実している	療育利用開始前に発達検査を行い、個々にあった療育内容を提供している。また、毎回の療育毎に評価を行い次のステップに移行することができる	発達検査以外のインフォーマルな評価法の改定などを行っていく 地域生活に反映できるよう本人のスキルを的確にとらえることができるアセスメントシートの利用を検討している

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	人材育成が遅れている	長年の慣習や手法に頼り、特性の理解、エビデンスに基づいた支援方法にかけるため般化が難しい	手法を当てはめるのではなく「特性理解と評価」を軸とした支援に改善するために組織全体で人材育成を組み立てていく
2	行政や保健、教育関係及び他の事業所などとの連携が不十分	事業所での取り組みがこどもやご家族に必要な働きかけであることを説明し、連携が必要であることを積極的に伝えていく	地域の会議、研修等へ積極的に参加し、事業の内容を機会があるごとに説明を行う
3	個別療育の事業所であるため、こどもの集団でも困りごとを十分に把握できていない場合がある	個別の療育のため限られた環境の中で上手く過ごすことができるため、職員が集団生活への般化が難しく、生活の場面で本人の困りごとを拾い出す意識に欠ける	保育所などへの見学を行ったり、集団生活の場でのこどもの様子を知るために関係機関と情報交換の場を設ける